

総目次

2024年(第1号～第6号)

[表示は、題名、著者名、(号)掲載ページ]

特集

第1号

質的研究成果の実装と 査読の役割

看護学における質的研究の現在：
QUARIN-Jセミナーより

(企画：萱間真美)

研究の背景とセミナーの趣旨 萱間真美. (1) 10–13.

行為文脈設定型実装研究へ——「実践への示唆」を重視する. 木下康仁. (1) 14–21.

現象学的研究の査読者への期待——解釈学的循環を実現するポイント. 西村ユミ. (1) 22–29.

「ケアの意味を見つめる事例研究」から考える査読のあり方と科学的厳密性の提案. 山本則子. (1) 30–38.

看護学における質的研究論文に用いられた方法論の動向. 三浦友理子. (1) 40–44.

ディスカッションとセミナーのまとめ.
グレッグ美鈴、麻原きよみ、萱間真美、木下康仁、西村ユミ、
山本則子. (1) 46–49.

[コラム] QUARIN-Jについて. 榊美樹. (1) 51.

第2号

EBPから実装へ1 モデルを深める

(企画：友滝愛)

看護実践におけるEBP実装モデルへの期待. 酒井郁子. (2) 90–92.

EBPにおける実装の理論・モデル・フレームワークを活用するために——その課題と方策を考える.
友滝愛、深堀浩樹、津田泰伸. (2) 93–105.

[看護分野でよく使われる・開発されているモデル]

ARCC Model. 高岡茉奈美、二見朝子. (2) 106–113.

Iowa Model. 松岡千代. (2) 114–121.

JB implementation framework. 西村直子. (2) 122–130.

[モデルを臨床にどう活かすか]

エビデンスに基づく看護実践の経験とARCC Modelの可能性. 坂本孝輔. (2) 131–135.

Iowa Modelの活用——伊勢赤十字病院の取り組み.
奥野史子、西川圭子、村田舞. (2) 136–145.

第3号

EBPから実装へ2 実装科学と社会への普及

(企画：友滝愛)

実装科学への扉. 友滝愛、深堀浩樹、津田泰伸. (3) 184–192.

[実装科学の理論と研究デザイン]

i-PARIHS Framework. 二見朝子. (3) 193–201.

CFIR——実装科学のための統合フレームワーク. 齋藤順子.
(3) 202–211.

RE-AIM. 榎戸文子、松本佐知子. (3) 212–218.

実装科学の研究デザイン. 寺田万莉奈、島津太一. (3) 219–229.

【座談会】 より良いケアをめざすためのEBP実装——千葉大学
医学部附属病院 包括的せん妄ケアチームの活動から.
酒井郁子、長谷川直、窪田容子、瀬尾智美、西垣昌和、
友滝愛／佐伯昌俊. (3) 230–243.

米国におけるEBP実装・普及の現状と展望. 岩間恵子. (3) 244–252.

[開発者より]

Development of an Implementation Framework and
Application using the Precision Implementation Approach®.
Laura Cullen, Elyse Laures. (3) 254–267.

The Exploration, Preparation, Implementation, Sustainment
(EPIS) Framework: Utility for Implementation Science and
Nursing Research.

Gregory A. Aarons, Erika L. Crable, Ryan Kenneally, Marisa
Sklar, Joanna C. Moullin. (3) 268–286.

(翻訳) 酒井郁子、佐伯昌俊. (3) 287–296.

第4号

質的研究活動を促進するための資源

QUARIN-J (Qualitative Research Implementation Network of Nursing-Japan)

(企画: 萱間真美)

質的研究活動を促進するための資源—QUARIN-J
(Qualitative Research Implementation Network of Nursing-Japan)
の開発. 萱間真美. (4) 332–336.

[QUARIN-J コンテンツ]

[査読委員, 編集委員, 編集委員長へのインタビュー]

インタビュー調査の紹介. (4) 338.

1. 現存・使用中のマニュアルやチェックリストにはどのようなものがあるか. (4) 338–340.
2. これまで査読・編集をする上で困難だったこと. (4) 341–344.
3. 普段どの視点から査読・編集しているか. (4) 344–345.
4. 普段査読をする上で気をつけているポイント. (4) 346–348.
- 5-1. 査読に関する学びをどこでどのように得てきたか. (4) 348–349.
- 5-2. その中で参考になっている事柄は何か. (4) 350.
6. 良い査読をするために現在取り組んでいること. (4) 350–351.
7. 資源として欲しいもの. (4) 351–353.

[査読の経験]

現象学的研究と査読. 西村ユミ. (4) 354–355.

質的研究の査読を受けた経験. 麻原きよみ. (4) 356–357.

学術コミュニケーションを効果的にするガイドライン.
三浦友理子. (4) 358–359.

データは古くなっても、問いは古くならない. 木下康仁. (4) 360–361.

質的研究への思い込みを自覚した査読経験. 小山田恭子. (4) 362–363.

事例研究と査読. 山本則子. (4) 364–365.

質的研究の査読者として大切にしていること. グレグ美鈴.
(4) 366–367.

英文誌査読の経験とSRQR. 萱間真美. (4) 368–369.

[ガイドラインと記録]

日本語版 Standards for Reporting Qualitative Research
(SRQR). (翻訳) 萱間真美. (4) 370–371.

看護学の知識体系を構築するための質的研究方法を用いた
学位論文指導プログラムの作成リーフレット. (4) 372–377.

Guidelines for evaluating dissertations for qualitative research
methods. (4) 378–380.

第5号

質的研究と研究倫理

研究を育てる倫理の在り方再考

(企画: 坂井志織)

新たな質的データと研究倫理——研究を育てる倫理の在り
方再考. 坂井志織. (5) 422–428.

質的研究の倫理を問い直す——画一的なルールを超えて.
田代志門. (5) 429–436.

研究倫理審査後の研究倫理——ダイナミックな研究の過程
での倫理的配慮に向けて. 細野知子. (5) 437–443.

質的研究におけるARO的な研究支援の可能性——研究倫
理審査委員会の運営経験者の立場から. 北尾良太. (5) 444–
451.

事例研究にまつわる研究倫理の課題——「ケアの意味を見
つめる事例研究」を中心に. 雨宮有子, 山花令子, 山本則子.
(5) 452–458.

認知症の発症前予測・予防のELSIと研究倫理. 木矢幸孝.
(5) 459–465.

質的研究において保障していくべき研究倫理とは? .
河原智江. (5) 466–471.

研究倫理とケアの倫理——看護系大学における研究倫理審
査外部委員の経験から. 榊原哲也. (5) 472–477.

第6号

経験の言語化の可能性

現象学的研究のインタビューを中心に
考える

現象学的な研究における経験の言語化について. 家高洋. (6)
516–522.

『医療とケアの現象学』とその方法論. 榊原哲也. (6) 524–528.

経験を明らかにすることの可能性と課題. 西村ユミ. (6) 530–
540.

現象学的な質的研究とそこから帰結する世界. 村上靖彦. (6)
542–549.

現象学的な研究における「意味」とは何か. 家高洋. (6) 550–
558.

特別記事

現象学的研究の成果を伝えるための論文投稿【執筆時編】——
採択に向けたTips. 坂井志織. (4) 384–391.

現象学的研究の成果を伝えるための論文投稿【査読対応編】——
採択に向けたTips. 棚川綾子. (5) 484–493.

兵庫県立大学先端医療工学研究所の活動——病院診療×医
療工学×看護学で研究の発展をめざす.
本田順子, 築田誠, 坂下玲子. (6) 564–568.

連載

集まる つながる 広がる 若手研究者のバトン

33 看護理工学を基盤に、ケアの「なぜ」の探索と「無いならつくる」によってめざす、より良い未来。高橋聡明。 (1) **1-5**。

34 研究を活用したエビデンス構築に基づく臨床実践の向上に向けた挑戦。椿 美智博。 (2) **81-85**。

35 「当事者の方々の役に立ちたい」——その想いを原動力に、研究を続ける。竹山美穂。 (3) **175-179**。

36 臨床経験を強みにしながら、現場に生きる研究成果の実装化をめざす。田中さとみ。 (4) **323-327**。

37 基礎研究を通して、「まだ誰も見たことのない世界」の発見をめざす。丹野寛大 (5) **413-417**。

38 看護師が豊かな人生を歩めるようなキャリアを実現するために。井上真帆 (6) **507-511**。

看護実践モデルの構築・評価・改善 ——その方法とプロセス

4 若年女性の月経痛の対処に焦点化した看護実践モデルの構築。福山智子。 (1) **68-74**。

5 「成人期にある高機能自閉スペクトラム症をもつ人の親」を対象としたエンパワメントを促進する実践モデルの構築。川田美和。 (2) **162-171**。

6 障害のある子どもの家族がもつ「生活と存在のまもり」を支援するための実践モデルの構築。川上あずさ。 (3) **312-318**。

7 自然災害時における病院看護管理者の受援力を高める看護教育実践モデルの構築。黒瀧安紀子。 (4) **402-410**。

8 言語的表現が困難な脳性麻痺を有する子どもの痛み緩和ケアの開発と実践——実践モデルの構築に向けて。河俣あゆみ。 (5) **496-503**。

9 自然災害に対する病院看護部の備えを促す尺度開発。西上あゆみ。 (6) **572-579**。

Journal Club on Paper II

英論文からリアルワールド・データ解析を どう学ぶか

3 米国退役軍人保健局における禁煙薬物療法の有用性——傾向スコア分析を中心に学ぶ(Duffy et al., 2019)。森本明子。 (1) **58-66**。

4 機械学習を用いた入院患者の転倒リスク予測モデルの開発——機械学習(教師あり学習)を学ぶ(Ladíos-Martin et al., 2022)。園田奈央, 森本明子。 (2) **152-160**。

5 アルコール摂取量の変化と認知症発症リスク——韓国での全国コホート研究より:2つの疫学・臨床的視点を学ぶ(Jeon et al., 2023)。大槻奈緒子, 山本陵平。 (3) **302-309**。

6 欧州協同小児腎移植構想(CERTAIN)登録リアルワールドデータを用いた小児腎移植におけるランダム化比較試験(RCT)の対照コホートエミュレーション(Patry et al., 2023)。池田直隆。 (4) **394-401**。

書評

『臨床・研究で活用できる! QOL評価マニュアル』
「測りにくいことを測る」への挑戦。友滝愛。 (1) **56-57**。

『訪問看護師による在宅療養生活支援を可視化する——希望実現モデル』 元来のありたい・あるべき訪問看護を文書化・可視化した画期的な書籍。福井小紀子。 (3) **300-301**。

『精神医療の専門性——「治す」とは異なるいくつかの試み』
精神医療の専門性を新たに問い直す画期的な書。榊原哲也。 (3) **310-311**。